令和６年度 第１回 富山県幼児教育推進連絡協議会　会議録

１　開催日時　６月 11 日（火）10:30～12:00

２　開催場所　県民会館 302 会議室

３　出席者（15 名）

石倉　卓子委員、石田　和義委員、石動　瑞代委員、黒田　卓委員、小島　伸也委員
小林　真委員、佐々木　昭彦委員、芹澤　譲治委員、波岡　伸郎氏（畠山　遵委員代理）
沼田　秀和委員、羽根　敬喜委員、松井　敦子委員、宮田　徹委員、森川　朋子委員
養藤　直哉委員

４　会議内容

⑴　開会
⑵　議事　富山県幼児教育の質の向上について
⑶　閉会

５　議事

（中﨑教育次長　挨拶）

事務局　―　（委員委嘱状交付）

畠山委員が欠席のため、波岡氏が代理出席。
特別委員　白梅学園大学名誉教授　無藤　隆先生は、第２回に参加予定である。
（委員長の選出と承認、副委員長の指名）

事務局　―　（令和６年度 富山県幼児教育センターの取組について説明）

関係機関等との連携体制づくり

富山県幼児教育推進連絡協議会を年２回、３つの専門部会を年１回開催予定である。
市町村幼児教育担当者連絡協議会を３回開催し、幼保小接続について協議する。

幼児教育の質の向上

１　幼児教育の質の向上及び園内研修の充実
幼児教育施設訪問研修は、47 施設実施予定。
幼児教育推進リーダー育成研修受講者（８名）各団体より推薦。
推進リーダーのフォローアップ研修の充実。

２　幼児教育・小学校教育の円滑な接続の推進
段階的に市町村に取組を移行していく。
幼保小接続についてのロードマップ案、接続推進計画案を作成。
地区別幼・小接続研修会の充実。
「わくわく・きときと」接続ガイド改訂版を作成、配布予定。

３　その他
訪問研修で特別支援に関するニーズがある場合は、小中学校巡回指導員が同行。
別添資料「安心子育てリーフレット」は、今年度も作成。配布方法を変更。

事務局　―　（令和６年度 富山県幼児教育推進連絡協議会 専門部会の説明）

昨年度同様、幼児教育推進リーダー活用部会、幼児教育施設訪問等研修部会、幼児教育・小学校教育接続部会の３部会を設置したい。
委員は、資料２－②専門部会の名簿のとおりである。部会長は、昨年度に引き続き、石動瑞代委員、宮田徹委員、小林真委員にお願いしたい。

委　員　―　（推進リーダー活用部会 部会長　挨拶と説明）
令和５年度は、フォローアップ研修として、乳児保育や特別な配慮を必要とする子どもの保育の研修を実施した。
さらなる資質を高めるための研修方法について検討。
令和６年度の取組として、研修ニーズのある分野に関してスキルアップを図るための専門的なプロジェクトチーム（乳児保育、保育環境、指導計、特別支援）研修を始めたい。訪問研修を推進リーダーのフォローアップ研修とし、リーダーの訪問回数を増やす。園内研修の実態調査の項目を検討する。

委　員　―　（幼児教育施設訪問等研修部会 部会長　挨拶と説明）
令和５年度は、訪問研修を広げ、さらにその質を高めるための方策について検討。
県内の各種団体で行っている研修についての意見交換と研修活性化について協議。
園の種類、行政や現場や養成校のようにセクターを超えた繋がりが深まった。
訪問研修を通して、県内の幼児教育の活性化をねらう。自園の保育を外に開き、対話を積み重ね、学び合うことで幼児教育の質が高まるという輪が広がるように、訪問研修のよさや魅力を伝えていく。

委　員　―　（幼児教育・小学校教育接続部会 部会長　挨拶と説明）
幼児教育・小学校教育接続推進事業（令和３～５年度実施）の成果として、スタートカリキュラムを幼保小で一緒に作成する意識が定着しつつある。また、幼児期の学びの上に小学校の学びをスタートさせるという意識が、少しずつ広まっている。
令和６年度は、市町村が主体となって幼保小の接続を進めるための準備期間であり、その支援をしていく。
現場の教師の実践意欲が高まるよう、分かりやすくポイントを絞った「わくわく・きときと」接続ガイド改訂版を作成する。

事務局　―　（幼児教育施設訪問研修の説明）
今年度は、複数回訪問の実施、アンケート項目の工夫が新たな取組である。訪問研修での学びの具現化、ニーズに応じた支援につなげたい。
訪問研修をより充実させることが、県内の幼児教育の充実に結び付くと考える。質の充実、研修の充実の視点から意見をいただきたい。

委　員　―　訪問を受ける園側と訪問する者（幼児教育アドバイザー・推進リーダー）が、同じ幼児教育・保育を志す者として、共に学び合う関係で、研修での学びをそれぞれに吸収し、互いの園の実践に結び付けようとする姿勢が素晴らしい。
園をオープンにして保育を見てもらい、意見交換する姿勢が、まだ全部の園ではできていない。まだ訪問研修を受けていない園に広がるように、努力したい。

委　員　―　実際に訪問研修に参加して、園児が、自由に主体性をもって楽しくいろいろな活動をしていることに大変驚いた。
保育活動の中で、地域に根差した取組も併せもって実施している場面も見受けられた。幼児教育の質という面で必要なことを勉強していきたい。

事務局　―　（「幼児教育と小学校教育の円滑な接続」の説明）
今年度からは、幼保小接続の取組をさらに広げ、定着させていく予定である。推進の主体を市町村に徐々に移行していくための、手立て、支援についてご意見をいただきたい。

委　員　―　上智大学の奈須先生が「小学校は幼児教育に学ぶべきだ」とおっしゃった。実際、「環境を通して行う教育」等幼児教育施設で行われている実践が、小学校で求められている「個別最適な学び」と合致していて、幼児教育を理解することに非常に意味があると改めて思った。小学校の教員が、幼児教育施設に訪問する意味がそこにある。幼児教育での場の設定、環境設定を小学校でも継続していく。小学校長会でも共有を図った。

委　員　―　わが子の小学校入学時に、親として戸惑いもあった。分かっているようで分かっていなかったことがあった。「わくわく・きときと」接続ガイドの幼保小の先生方の取組の様子から、子どもたちがスムーズに小学校に行けるような仕組みがあることが、この会に参加して分かった。保護者に伝える努力が必要ではないか。

事務局　―　小学校に入学されるお子さんのいるすべての家庭に行き渡るようにするために、「安心子育てリーフレット」を今年度から就学時健診の機会に、小学校から配布する。

委　員　―　就学時健診から入学までの間に進路を決めるのは、非常に間隔が短かすぎるという意見がある。もう少し早い段階で子どもの性質に気付き、進路を考えるまで十分な時間が必要なのではないか。
接続については、園でリーダーだった１年生を赤ちゃん扱いしてしまう点が問題である。１年生にできることは１年生にさせるという考えを小学校側がもってほしい。
訪問研修については、他園から参加できるように、全部の園に日程を配布し、「来ていただいても結構です」という形だとありがたい。他の園の研修に参加することで、「もっとお話を聞いてみたい。できれば、あの先生に助言してもらいたい」と思えるような機会を用意すると、訪問研修のハードルが下がるのではないか。

委　員　―　進学先の小学校の先生が、園には来ているが、気になる子どもについて話を聞くことが目的となっている。普段の保育の様子を見てほしい。環境の設定等は、先生同士で話をしていても伝わらない。子どもが活動しているところを見て、環境から学ぶというところを実感として受け取ってほしい。
幼稚園、保育園の先生、教育委員会の方、大学の先生、このメンバーが一同に会して議論をすることは、以前は考えられなかった。幼児教育センターができ、同じ会議で発言する場ができてよかった。

委員長　―　今、訪問研修もその垣根、種類を越えて互いに見合うことも始まっている。各団体、幼稚園、認定こども園、保育所、それぞれの方法で取り組まれている研修もまとめていただいて、連携できるようになってきている。この会議も、そのような繋がりをつくっていく非常に重要なところである。

委　員　―　今、小学校でも１人１台の端末を扱う時代。園児も、自分で持っていなくても 100 人中 100 人、スマホ等を使える環境になっている。ネットとの向き合い方や端末の扱い方は、家庭教育が原則であり、我々ＰＴＡ連合会でも、ネットはどういったものか、スマートフォンの扱いはどうしたらよいかを家庭で教育することを保護者に向けて通達している。しかし、20 代 30 代の親は、子育てで目いっぱい。ネットに触れ始め２、３歳の頃から、端末を扱う上での家庭内でルールを決めていかなくてはいけないことは分かっているが、そこまで気が回らない。幼少期の段階から支援するシステムをこれからの取組の視野に入れていただきたい。

委員長　―　どのように子どもに指導していくか、子どもに直接というよりも親を通して指導していくことも考えていく必要がある。

委　員　―　子どもたちは、様々な環境との出会いや体験の積み重なりの中で、さらに思いを膨らませ、いろいろな挑戦や試行錯誤、うまくいかないことがあり、様々な感情を味わいながら育っていく。いろいろなことを感じる力は、何ものにも変えられない子どもたち自身の力。保育者は、その営みに丁寧に寄り添っていく。子どもたちは、誰もが伸びゆく可能性をもった存在であることを意識しながら、日々の保育の中で、園内研修や訪問研修で話し合い、語り合うことを大事にしている。小学校の先生方とも、子どもたちの普段の姿を通して、保育教育の方向性等を話し合う場を増やしていきたい。

委　員　―　就学時健診の後、学校から園へ、特別な配慮が必要なお子さんなのではないかと問い合わせがあるが、園ではその子どもの特性として捉えて保育をしている。就学時健診で初めて指摘されると、入学までの短期間に進路を決めなくてはならない。その子どもの人生を左右しかねないことなので、特別支援に関する接続も大事である。
幼児期に大事にしたいのは、興味・関心からの遊び。１人１台端末ですぐに調べることができるが、今（幼児期）でなくてもよい。何かにぶつかったとき、どうしたら乗り越えられるかを考えることを大事にしたい。小学校でＩＣＴの活用を進めなくてはならないことも分かるが、ここは互いに学ぶ必要があるのではないか。

委員長　―　幼児期の学びが、そのあとの小学校、中学校、高校に繋がっていく。いかに学びをつなげていくかは非常に重要なところ。ＩＣＴの活用の仕方も、もちろん、その中に含まれる。

委　員　―　教育も経営も、よい人からものを学ぶ。同業他社の素晴らしい製品なり商品を見て、なぜこんなよいものができるのかと思ったとき、私は、現場を見せてほしいと実際に足を運ぶ。また、逆に他社から見せてほしいと言われて、実際に現場をお見せする。そうすることで、非常に刺激を得られる。訪問研修にも、そういうものが大切なのではないか。先ほどのお話の伸び伸びとすばらしい環境で保育をしている園に、幼児教育の先生方も足を運ばれるのは、刺激があるのではないか。ものづくりも、経営も、教育も一緒で、よい方から学ぶことが大切である。

委　員　―　先ほどのタブレットの話だが、家庭の保育環境と保育現場の保育環境、ひいては地域の保育環境が繋がって見えるとよい。何ができるか具体的なことは、それぞれで考えていく必要がある。
保育の魅力は、保育者の魅力、遊びや活動の魅力、乳幼児期の子どもの魅力である。子どもたちは、予想もつかない、枠にはまらない可能性の塊。その魅力を発信していくのが訪問研修やリーダー活用の研修なのではないか。保育の魅力を見つけられる、気付けるような研修になっていくとよい。
接続は、切り口を多様にして、ハードルの低いところから風穴を開けてくとよい。

委員長　―　今年１月１日に能登半島地震が起こったように、地震はいつ起きるかわからない。避難の仕方もいろいろ考えておかねばならないと思い知らされた。防災に関する研修もメニューの中の一つに加えていただくなどご検討いただきたい。

事務局　―　（幼児教育センター所長　挨拶）
（終了）